

# 社会の構造としての機能的寛容 類的人間から個的人間へ

萩原 優騎 \*

## はじめに

国際基督教大学 21 世紀 COE プログラム「『平和・安全・共生』研究教育の形成と展開」では、「平和」、「安全」、「共生」という三つの概念に関する理論が機能するための条件を検討することが、課題の一つであった。村上陽一郎が提唱した「機能的寛容」は、その条件を示すものである。それは、個人の内面においても共同体の在り方においても、創造性を備えた平和と安全と共生を作り上げ、維持し発展させていく要諦としてのメタ理論であると、千葉眞は定義している。<sup>(1)</sup> この定義から確認できるように、機能的寛容は、個人の認識の構造と社会の構造の、両者に適用可能なものとして構想されている。メタ理論としての機能的寛容について、本誌第 68 号に掲載の拙稿「機能的寛容における他者の問題」では、個人の認識の構造に焦点を当て、D. W. ウィニコットやジャック・ラカンの精神分析を参照して記述した。その続編である本稿では、機能的寛容を発揮する個人と社会との関係について考察する。そして、その考察を通じて得られたことに基づいて、機能的寛容を積極的に実現できるような社会の構造について、稿を改めて論じることにした。

最初に、村上が機能的寛容の一例として挙げている、ヨーロッパの近代社会における「芸術」という概念の位置づけについて確認する。ここでは、個人の認識レベルにおいて導入された「ノモス」と「カオス」という概念が、社会の構造をも説明するものとして導入される。それらを軸として、社会における芸術家の機能的な役割が論じられている。次に、芸術家の機能に近いものとして村上が挙げているシャーマンという存在について、ケネルム・バリッジの社会人類学における議論を扱う。バリッジは、「類的人間」と「個的人間」という二つの概念を対比させつつ関連させながら、この問題を明らかにしている。そしてバリッジは、シャーマンが果たしている社会的機能

\* 日本学術振興会特別研究員 PD（東京大学大学院新領域創成科学研究科）、  
本学教養学部非常勤講師

を論じると共に、そこに見出すことのできる可能性をさらに展開し、社会を変革するための条件を問うことを試みている。この条件について、バリッジの議論に即して明らかにし、機能的寛容との関連性を分析する。最後に、バリッジが社会変革の構想について読者に留意を促している点に触れ、そこに浮上してくる新たな課題を示唆する。

## I. 社会における機能的寛容

### 1. 近代社会のノモス

村上陽一郎が構想する「機能的寛容」論は、「ノモス」と「カオス」という二つの概念を主軸として展開される。まずは、これらの概念の定義と位置づけを見ることから始めたい。それにより、「機能的寛容」論が、社会の機能を説明するためにどのように適用されるのかということ、順を追って見ていく。ノモスとは、社会共同体としての本来の働き、つまり、その成員を「人間」たらしめる力である。<sup>(2)</sup> これは、「社会化」と表現してもよいだろう。共同体の働きとしてのノモスには、二つの側面がある。第一に、言語によって認識の枠組みを作る認識論的ノモスであり、第二に、共同体の他のメンバーの行動や躰によって個人の中に構築されていく、行動規範的ノモスである。<sup>(3)</sup> 言語も躰も、自他の共同的な関係性において成り立つものである。アーヴィング・ゴフマンは、社会の成員による「相互行為」として、そのことを説明している。ゴフマンによると、社会の成員とは、一種の構成物にほかならない。相互行為者として行為する際の諸要素を獲得することによって構成物になる、すなわち、内なる心的傾向によってではなく、外側から刻印される様々な道徳的ルールによって織り成された構成物になるということである。<sup>(4)</sup> そのような構成物になることで、社会がその構成員に課す秩序からの大幅な逸脱が防がれる。人格の成長の過程とは、周囲の世界を破壊する能力が強まってきても、破壊を自重することを学ぶことであると、ゴフマンは指摘している。<sup>(5)</sup>

この過程に、ノモスが関与している。つまり、ノモスは、カオスを統御する役割を持っている。カオスとは、個人に内在するエネルギーであり、様々な方向に闇雲に放射するような、可能的なものとして存在している。<sup>(6)</sup> しかし、カオスはノモスによって完全に統御されるわけではない。後述するように、両者がせめぎ合っている状況こそが、人間という存在を社会的な構成物として成り立たせている。このような構成物としての人間を管理する手段の一つとして近代社会が構築したものの一つが、「他者危害回避の原則」と呼ばれるものである。この原則は、生命倫理学において、自己決定権と

の関連で論じられることが多い。それは、「判断能力のある成人の場合、自身の生命、身体、財産等に関して、たとえ本人にとって不利益な決定を下したとしても、結果として他人に危害を及ぼすことにならない限りは、その決定を認める」と要約できる。<sup>(7)</sup> この定義からも明らかなように、近代社会では、自己決定権の内容と適用範囲、そしてその行使の主体が限定され、その制約下で人々の自由が容認された。そのような社会は個人主義的であるがゆえに、共同体はノモスの規制力をできる限り縮小し、成員のカオスの発現を最大限に発揮できることが望まれた。<sup>(8)</sup> 別の表現をするならば、一定の範囲内での逸脱を人々に許容するということである。そこでは、中心と周縁の区別は不明確になり、誰もが一定の程度は周縁人としてふるまうことが一般的となる。<sup>(9)</sup>

人々に自由がもたらされるということは、社会の安全という観点から見た場合には、否定的な評価が与えられることもある。なぜなら、共同体の統一的な理念が欠け、危険をはらんだ社会になるからである。<sup>(10)</sup> ここには、近代社会に特有の捻れがある。他者危害回避の原則の原型を用意したとされる J.S. ミルの構想では、共同体の統一的な理念の維持ではなく、社会の進歩が主眼であった。優れた才能と教養を持つ少数者に従う場合を除き、民主制は政治の凡庸化をもたらすのだから、賢明で高尚な事柄の創始は個人からであると、ミルは考えていた。<sup>(11)</sup> ところが、自由は少数の優れた人物の特権なのかという反論が出てくる。近代社会では、判断能力のある成人という一定の制限を設けながら、多数の人々に対しても自己決定権が付与された。この状況は、ミルが想定した社会の進歩とは正反対の結果を生む。つまり、自律的な個人が採用することを望むはずの生活や成熟の諸形態は、むしろ締め出されてしまう。<sup>(12)</sup> こうして成立した大衆社会では、ミルの想定とは全く異なる意味と目的において、自己決定権が尊重され、擁護されることとなった。人々は、自身の欲するままに行動する自由を望み、それが一定の制約下で実現された。

そのような自由が個人に容認される場面では、共同体の統合性は低下する。それは、共同体の構成員に対して危害を与えないという他者危害回避の原則の適用が、相手に対する消極的かつ無関心な態度へと容易に変質してしまう危険性を内包していたということである。<sup>(13)</sup> こういった事態になったとしても、共同体としての意思決定や秩序の維持は必要である。そのため、個人の自由度を最大限に保証する代わりに、人々の意見の統計的な集約としての「多数」を尊重するようになった。<sup>(14)</sup> これは、個人の自由を認めた近代社会が、その維持を図る上で自由民主主義の制度を採用したということの、一つの側面であると言えよう。一方、中央に集まる個人が多数を占めることに

よって、社会はそれなりの安定を享受できるが、そうした安定は倦怠と不満を生み出す。<sup>(15)</sup>しかし、これらが生み出されると同時に、その極度の増大による社会の不安定化を防ぐための手段も、近代社会に見出すことができる。それは、社会の周辺、すなわち社会全体のノモスからはみ出た余剰部分に位置する人々によって、新たな価値の創造や新たな可能性への試みが保証されるということである。<sup>(16)</sup>その一例が、次に示す「芸術」という活動と、その営みを支える芸術家の人々であった。

## 2. 芸術家の役割

近代社会は個人に自由を一定の範囲内で認めるが、まさにその点に、ノモスの働きを確認できる。そして、芸術という一つの下位社会が、カオスへの傾斜の特に強い性格を持っている。<sup>(17)</sup>その例として村上が挙げているのは、「芸術か、猥褻か」というチャタレー裁判である。通常はそこから逸脱すれば罰せられるような、社会の公序良俗の基準を外れていても、芸術の領域の活動では許され得る。<sup>(18)</sup>このような基準からの逸脱は、カオス的な側面を持っていると同時に、それが社会制度によって容認されているという意味では、ノモスの統制下にある。換言すれば、逸脱のエネルギーが発揮される場を用意しつつ、それに限定性を付与することで、秩序の安定性を保証するという仕組みである。もちろん、この仕組みは、近代社会にのみ観察できるわけではない。例えば、宗教は享楽の空間を人工的、限定的に作り上げることによって日常を人々に一瞬忘れさせ、「禁止の解除＝欲望の解放」が一時的に実現するため、日常における禁止をより徹底させることができた。<sup>(19)</sup>個人主義を前提とした近代社会では、共同体が構成員に課す禁止はそれ以前の社会よりも少ないとしても、秩序を維持するためには一定の制約は不可欠である。その制約こそが、他者危害回避の原則であった。

そこでは、社会の個々人の持つカオスへの傾斜を芸術家と称される人々が代行しているのであり、その機能が発揮されることで、一般社会の中に暗在するカオスは昇華され、近代社会の持つ脆弱性への安全弁となっている。<sup>(20)</sup>ここでは詳述できないが、村上の科学史的な観点からの説明によれば、現在我々が「芸術」として社会的に認知している諸々の活動は、近代社会にこそ顕著なものである。もちろん、上述のような芸術の効用は意図的に生み出されたわけではないだろうが、芸術家と称される人々のノモスに対して破壊的な活動が顕著になった時、社会はその効用に気づいたのかもしれない。<sup>(21)</sup>社会の日常性から大きく逸脱するような人々を取り込むようにした秩序の形成を、近代社会が進めてきたことは確かである。そうした中で、芸術の効用に気づ

いたのかもしれない。社会から逸脱する人々を排除するのではなく、社会の秩序の中に繋ぎ止めておくための有効な手段として「芸術」というジャンルが機能し、そこにそうした人々の仕事が位置づけられた。<sup>(22)</sup>そして、そのような位置づけは、一般の人々だけでなく、芸術活動を展開する当事者にも関わるものである。すなわち、芸術家と呼ばれる人々の個人のエネルギーを社会の内部に吸収すると共に、一般の人々の中に潜在的にくすぶっている規範への反抗や逸脱のエネルギーをも芸術家が代替的に引き受けることで、それらのエネルギーを共同体内部で吸収するという機能である。<sup>(23)</sup>このように、芸術は二重の役目を果たしている。

しかし、こうして逸脱のエネルギーが二重に吸収されるということは、共同体の現状における安定性を半永久的に保証するものとはならない。芸術家が提示するものは、既存の社会規範や共同体が自明のものとして守ってきた価値基準への抵抗、批判、抗議、拒否を示すのだから、いかにそれが「芸術」の名の下に提示され、社会が容認しようとして、既存の規範に対する否定の宣言である。<sup>(24)</sup>近代社会において、芸術が様々な政治運動と結びついてきたことは、その証であろう。このような芸術的な営みが共同体の中で形式的にせよ容認されることは、共有されている規範や価値が絶対のものではないこと、社会全体の規範が動くことを容認せざるを得ないという結果を生む。<sup>(25)</sup>ただし、一方で芸術が一種の安全弁でもあることは、これまで論じてきた通りである。芸術という「安全装置」の場合、本来的に安全であるのは社会ないし共同体であり、それが成り立つ基盤としての共有される価値体系は、安全ではあり得ない。<sup>(26)</sup>芸術が政治運動と結びつく時、それは概ね社会制度そのものに対してではなく、それを支える価値体系や規範への攻撃であった。このような安全装置に頼る限り、近代社会の「安全」という概念には、既存の規範が無傷のままというわけにはいかないということが含意されているはずである。<sup>(27)</sup>

ここに、「機能的寛容」というものの働きを認めることができる。カオスはノモスによって完全に統御されるわけではなく、ノモスから常にはみ出す余剰の部分が存在する。<sup>(28)</sup>このカオスの余剰部分が、機能的寛容である。これは、他者危害回避の原則が示していたような、自身とは異質な存在を許容すべきであるという、通常用いられている道徳的な意味での「寛容」とは異なる。カオスの余剰部分こそ、人間が特定の共同体のノモスに完全に束縛されることなく、他の可能性の存在に理解を示し、あるいは現状において成立している以外の新たなノモスの創出を試みることを保証している。<sup>(29)</sup>このような機能は、人間の認識の構造だけに当てはまるのではなく、社会のダ

イナミズムを構造的に保証しているものでもある。

## Ⅱ. バリッジの社会人類学

### 1. シャーマンの機能

芸術家の役割に類似したものとして、村上はシャーマンにも言及している。近代化の影響をあまり受けていない共同体としての呪術的な社会では、通常の間人には達し得ないような精神状態を自らに実現できる力を持っている人物としてのシャーマンが、重要な役割を果たしている。<sup>(30)</sup> そのような精神状態とは、ノモスからの逸脱としてのカオス的な傾向を持つものである。逸脱した状態へと容易に陥ることができる人間は、日常的な秩序の側から見ればアウトサイダーとして分類されるが、呪術社会ではそうした人々に「病気」のレッテルを貼るのではなく、シャーマンとして共同体の秩序の中に取り込んでいる。<sup>(31)</sup> このようなシャーマンの機能について、機能的寛容との関連で論じるために有効であると思われるのが、ケネルム・バリッジの社会人類学的考察である。バリッジは、シャーマンについて論じるに当たって、「類的人間」と「個的人間」という二つの概念を対比させている。「類的人間」とは、自らと同類の人々と様式を分かち合うことによってしっかりと結びついた伝統主義者であって、所与の意味づけは、彼らにとって出来事よりも重要である。既存の出来事に対して、新しい出来事と新しい関連性が生まれてくるということ、認めたがらない。その一方で、個的人間はその個別性を信じて、新しい出来事に照らされた新しい関係性や、古い出来事の中に隠された新しい面を、慣習的な意味づけの体系と弁証法的に関わらせることによって、新しい理解の可能性を示し、新しい意味づけを提示する。新しい真理の可能性が存在しはじめるのだ。<sup>(32)</sup>

最初に、類的人間の社会におけるシャーマンの位置づけについて論じられている。シャーマンの際立った力は神々や精霊の賜物とされており、霊の活動の結果と見なされる病気や精神錯乱に苦しむことをきっかけに、夢の効果的解釈を通じて己を知り、苦しみの原因である霊を制御できるようにならなければならない。<sup>(33)</sup> 制御の能力とは、これまで用いてきた表現では、ノモスに関わるものである。類的人間の中で社会化されていない要素は抑圧されるのではなく、制御され利用される。<sup>(34)</sup> つまり、シャーマンの制御の能力は、類的人間による社会化の外部にあるものを扱う。バリッジの定義では、社会化とは、型にはめ画一化することであり、人生のある一点で行われるものではない継続的な過程である。<sup>(35)</sup> そして、ある人間がシャーマンになるということ



は、能力に関する側面だけでなく、類的人間の社会との関係という側面も含む。シャーマンになる人間が見習い期間を終えて独り立ちする際、それは象徴的な死と身体の切除の形で表わされるのであり、この人物は類的人間の社会にとっては死んでしまった存在となる。<sup>(36)</sup> そのような通過儀礼を経て、シャーマンとしての地位が付与される。ただし、類的人間の社会化から逃れる要素、すなわちノモスから逃れるカオスの要素を制御し利用するという点で、シャーマンになる以前に持っていたノモスとの関係は変容しているとしても、関係自体は失われていない。脱魂には決まった表現や表出のレパトリーがあり、その中で制御されているのだから、そこでは文化的道德慣習的能力が使用されているということになる。<sup>(37)</sup>

このように、シャーマンは類的人間ではないとしても、当該の共同体がノモスの制御範囲外にあるものとの関係を調整する上で不可欠な役割を担っている。換言すれば、シャーマンはノモスの外部として社会的に定義されつつ、同時に内部の在り方をも規定している。例えば、占い師としてのシャーマンは、道德的問題の性格を規定し、明確化し、解決法を教えて規範的道德体系を再確認する。<sup>(38)</sup> ここにおいては、従来の規範が反復されるというだけではない。その過程は、現行の道德慣習を再検討し発展させ、さらに超越させる可能性をも含んでいる。<sup>(39)</sup> 再確認という行為には、それまで自明だったものを対象化するという側面も含まれているからである。こうして、シャーマンは自身の側には直接的で明確な改変が全くない場合でも、道德慣習の改変の火付け役になり得る。<sup>(40)</sup>

この役割は、村上が定義する意味での「カルチャー・ショック」を誘発するものである。それは、一つの伝統の中で当然のこととして受け入れられている事柄が、実際には「一つの選択」であったということが、他の伝統との比較の中で初めて理解されるという事態を指す。<sup>(41)</sup> そのような認識は、既存のノモスとの関係に対して、自己言及的に作用する。つまり、自らが多くの伝統の中の一つを選んで生きてきたということの自覚の発生であり、自身にとって当然であったことが一つの選択の結果であったということの認識を通じての、自己の相対化の始まりである。<sup>(42)</sup> ただし、そうした相対化の後には、この作業を通じて出会った出来事に、新たな意味を付与しなければならない。その意味で、相対化の作業の中でさえも、記述はその一貫性を要求するのであり、それが理論である。<sup>(43)</sup>

## 2. 共同体の安全

これまで見てきたような芸術家やシャーマンは、社会の機能的寛容を保証する役割を担っていた。しかし、そこで実現する機能的寛容は、当該の共同体が一定の変容を遂げるきっかけにはなり得ても、根本的な変革には至りにくいものであった。むしろ、そうした変革の可能性は、カオスが働く範囲が制御されていることによって、あらかじめ防がれている。これは、幻想による代理機能として、ゴフマンが論じていることにも重なる。人々は、様々な運命性を引き受けている現実の人物あるいはフィクションの人物に一体化し、代理経験的にそれらの状況に参加する。<sup>(44)</sup> 代理経験をもたらす存在として挙げられているのは、映画や舞台の英雄である。それらの人物への同一化がなされるのは、現実世界から背を向ける時にほかならない。<sup>(45)</sup> そのような行為の効果は、単に日常からの距離が生じるということだけではない。この同一化によって、運命的活動をする中で確定された行為規範、すなわち、日常生活において完全に維持するには代償が高くつきすぎて維持しがたい規範が確認され、罰則金を払わないで済む形で日常行為を判断するための思考の枠組みが出来上がる。<sup>(46)</sup> こうして、バリッジがシャーマンの調整機能として指摘していたことと同様の役割を、これらの代理経験をもたらす存在も担うことになる。したがって、社会を構成しているルールは、人々が代理経験をする類型的な運命性の世界によって維持されており、またその世界をそれらのルールが支えている。<sup>(47)</sup>

英雄の機能に類似した機能を担う存在としては、社会の中心から外れている人々も挙げられている。それらの人々は、社会の中心に位置する人々から見れば、大きな逸脱であると判断されるような行為に及ぶこともある。つまり、周辺の人々は、社会の現実とされるものから離れていくことで自由な身になり、道徳的幻想を実現すると、ゴフマンは論じる。<sup>(48)</sup> その一例が、不良や犯罪者である。彼らは、人々が投射する場面を実際に動かすことで、何がしか協力しているという。<sup>(49)</sup> これは、そのような存在による一定の逸脱は、結果として、社会全体の安定に逆説的に寄与しているということである。こうした点についてバリッジは、先程引用した社会化に関する定義の直後に、共同体のダイナミズムと道徳慣習との関連において述べている。規則が多すぎると文化は窒息するのであり、逆に自己主張は文化を活気づけるかもしれないが、統制を失えば文化を破壊するという。<sup>(50)</sup> そういった逸脱による調整機能を支えているものを、ゴフマンは「想像の上での世界の二分法」と呼ぶ。一つは、家庭、統制されたビジネス、専門職など、安全で静かな場所であり、もう一つは、岐路に立ち、つかの間



の危険に入るように要求することで表現を生み出すような活動であって、この二分法から幻想が作り出される。<sup>(51)</sup>そして、この二分法は、社会の中心に位置する人々が消費するだけではない。それは、不良や犯罪者の自尊心をも生み出すのであり、そのような自尊心を感じさせることは、彼らの行動を利用することの引き換えに支払われる代償であるかもしれないと、ゴフマンは指摘する。<sup>(52)</sup>

逸脱した存在を抱え込むことを許容するという社会の調整機能を論じるために、バリッジは「寛容」という概念を用いている。寛容の限界と様式は制度化され、予期することのできる反復的逸脱は、一般的道徳慣習の本体からは切り離して隔離される。<sup>(53)</sup>ここで言う「寛容」は、異質な存在を許容するという道徳的な配慮にとどまらず、カオスを制御するという機能的な側面も含むものとして捉えることができるだろう。「予期することのできる反復的逸脱」について、バリッジはいくつかの例を挙げている。性行為のように場と期間を限って特別扱いが許可される場合には、よい結果が出なければ、滞ったエネルギーが体制の外に放出されるとしても、その結果は予測可能である。<sup>(54)</sup>逆に、ノモスを維持するために、当該の共同体からの隔離が図られる場合もある。例えば、聖人や天才は追い出されて吊るし焼かれるかもしれず、文化的に調和しているはずの現実が正当性を失うような形で範疇が再構成されてしまう狂気は、施設に収容されてしまうかもしれない。<sup>(55)</sup>ただし、その一部は制御されて、社会に組み込まれる。シャーマンという「極北の狂気として多くの西洋人臨床医によって定義され治療されたものは、極北の風土の中での生活を何らかの形で秩序立てるように作用したのであって、彼ら自身はまったく別の理解をもっていた。狂気は制御され、シャーマン——人格変容の専門家であり、境界を行き来できる者——は、人間の可能性を完全に展開して示すための手段として、これを用いることができたのである」。<sup>(56)</sup>バリッジのこの記述は、社会におけるシャーマンの位置づけとして村上が論じていた、既に引用した記述に重なる。

そしてバリッジは、シャーマンの位置づけと対比する形で、道徳に再び言及する。「広範囲のアノミーや混乱をいつでも引き起こす可能性のある心理的生理的疾患は、客観化され、制御され、共同体全体の力の源ともなる。この制御は、日常的交流の中にある道徳共同体とは切り離され、それと補完的な対立を形づくるように制度化される。道徳共同体は、安全である。道徳とは、生活と文化の全体に対して、断片的に作用するだけのものなのだという事実を、共同体の成員は知ることになる」。<sup>(57)</sup>ただし、村上が芸術家について指摘したように、そしてバリッジもシャーマンにつ

いて述べていたように、この道德共同体の安全は静的なものではない。村上による表現を繰り返すならば、安全なのは共同体であり、価値体系そのものではない。共同体は、それが一定の変化を被る形で維持される、動的な側面を有している。ただし、その変化が一定である以上、芸術家やシャーマンの言説が共同体の根本的な変革をもたらすとは限らない。シャーマンが新しい思想を考え出し表出することが可能なのは、彼らが共同体とは対立した存在であり隔離されているからであるが、その思想を誰かが取り上げてくれる場合以外は無視され、既存の道德慣習を改変しようとしても吸収されてしまう。<sup>(58)</sup>

## おわりに

以上において、芸術家やシャーマンが果たす機能的寛容の射程を検討した。その機能は、共同体の維持に一定の有効性を示すと共に、その根本的な変革に至るとは限らないという点では、限界を示すものでもあった。バリッジは、このような状態からさらに進んで、個人的人間が社会を変革する契機が創出されるための条件について論じる。そこで、類的人間との対比で、個人的人間が再度定義される。「それは、類的人間の表象する社会関係とは正反対の社会関係を具現する者となる。個人的人間は、別種の社会や道德秩序を夢想する批判者でもあり、伝統を変化させようと待ちかまえる創造的な発火装置でもあるのだ。別の言い方をすれば、個人的人間とは、所与のあるいは慣習的な道德体制の変革を可能とする諸関係の体現者である」。<sup>(59)</sup> もちろん、類的人間と個人的人間は全く別の人間であるどころか、一人の人間がどちらにも変容し得る。このことを論じるために、バリッジは「個別性」という概念を用いる。「個別性とは、類的人間から個人的人間へ、または個人的人間から類的人間へと移動することの可能性と能力である。ここでは、自己とは統合を可能にするとともに統合を取り去る力としてのエネルギーであって、特定の諸関係を類的人間として統合することもでき、また個人的人間として統合することもできる」。<sup>(60)</sup>

この「自己」もしくは「エネルギー」は、村上の言うノモスとカオスの総体と考えてよいだろう。奇妙不可思議な出来事に目を奪われ引きこまれることにより、類的人間の行う再生産と諸事物の真理との間の食い違いに気づく時、慣習的範疇を超越し、出来事を新しい意味づけの中に再統合しようとするのであり、ここに個人的人間が立ち現れる。<sup>(61)</sup> これは、村上が「カルチャー・ショック」として定義した事態である。つまり、類的人間が再生産する「伝統」を「一つの選択の結果」として相対化するという、

機能的寛容の実現にほかならない。ただし、類的人間から個的人間へと移行した人物は大抵の場合、半永久に個的人間のままでいるというわけではないだろう。たとえ一時的にはあっても真理が露出したとしても、それは言語化され意味づけされる時には、文化的慣用の中に閉じ込められてしまう。<sup>(62)</sup>これは、人間という存在が、社会的、文化的存在であるゆえと言えるかもしれない。個的人間によって新たな意味づけを与えられた出来事は、その意味づけを成り立たせた新しい文脈において共有され、自明性が再び支配する。

しかし、そこにあるのは、変革を実現する前の共同体において共有されていたものではない。従来のノモスを退け、自らの確固たる地盤を失った末に新たなノモスを見出す時、それがかつて自らの拒否した伝統に似たものであったとしても、もはや以前のものとは異なっている。<sup>(63)</sup>このような変容の経験においては、出来事との出会いが不可欠であることを、バリッジは指摘した。ただし、類的人間に出来事を認識させ個的人間とするのは、出来事自身の力によるのではなく、そうなるように仕組まれた文化の中に人が投げ込まれているからである。<sup>(64)</sup>そのような共同体をどのように積極的に構想できるのかということが、次の検討課題となる。

## 注

- (1) 千葉、p.320
- (2) 村上(2006)、p. v
- (3) 村上(2009)、pp.18-19
- (4) Goffman, p.45 (邦訳 p.44)
- (5) *Ibid.*, p.170 (邦訳 p.177)
- (6) 村上(2009)、p.18
- (7) 加藤、p.167
- (8) 村上(2009)、p.22
- (9) 同上
- (10) 同上
- (11) Mill, p.124 (邦訳 p.291)
- (12) Gray & Smith, p.18 (邦訳 p.24)
- (13) 村上(2006)、p.4
- (14) 村上(2009)、p.22
- (15) 同上、pp.20-21
- (16) 同上、p.21
- (17) 同上、p.23
- (18) 同上
- (19) 樫村、p.17
- (20) 村上(2009)、p.25
- (21) 同上
- (22) 村上(1998)、p.127
- (23) 同上、pp.127-128
- (24) 同上、p.128
- (25) 同上
- (26) 同上、p.129
- (27) 同上
- (28) 村上(2009)、p.20
- (29) 同上
- (30) 村上(1998)、p.122
- (31) 同上、p.123
- (32) Burrige, p.33 (邦訳 p.38)
- (33) *Ibid.*, p.117 (邦訳 p.119)
- (34) *Ibid.* (邦訳同上)
- (35) *Ibid.*, pp.173-174 (邦訳 p.177)
- (36) *Ibid.*, pp.117-118 (邦訳 p.120)
- (37) *Ibid.*, p.118 (邦訳 p.120)
- (38) *Ibid.*, p.119 (邦訳 p.121)

- (39) *Ibid.* (邦訳同上)
- (40) *Ibid.* (邦訳同上)
- (41) 村上(2006)、p.14
- (42) 同上、pp.14-15
- (43) 宮永、p.216
- (44) Goffman, p.262 (邦訳 p.268)
- (45) *Ibid.*, p.266 (邦訳 p.272)
- (46) *Ibid.* (邦訳同上)
- (47) *Ibid.* (邦訳同上)
- (48) *Ibid.*, p.267 (邦訳 p.273)
- (49) *Ibid.* (邦訳同上)
- (50) Burrige, p.174 (邦訳 p.177)
- (51) Goffman, p.268 (邦訳 p.274)
- (52) *Ibid.* (邦訳 pp.274-275)
- (53) Burrige, p.174 (邦訳 p.177)
- (54) *Ibid.* (邦訳同上)
- (55) *Ibid.* (邦訳同上)
- (56) *Ibid.*, p.174 (邦訳 p.178)
- (57) *Ibid.*, p.175 (邦訳同上)
- (58) *Ibid.*, p.176 (邦訳 p.179)
- (59) *Ibid.*, p.5 (邦訳 p.11)
- (60) *Ibid.*, pp.5-6 (邦訳 p.11)
- (61) *Ibid.*, p.7 (邦訳 pp.12-13)
- (62) *Ibid.*, p.9 (邦訳 p.14)
- (63) 村上(2006)、p.33
- (64) Burrige, pp.238-239 (邦訳 p.239)

## 参考文献

- 樫村愛子『ラカン派社会学入門 現代社会の危機における臨床社会学』世織書房、1998年。
- 加藤尚武『現代倫理学入門』講談社学術文庫、1997年。
- 千葉真「あとがき」、[村上陽一郎、千葉真編]所収、2009年。
- 宮永國子『人類学的出会いの発見』世界思想社、1994年。
- 村上陽一郎『安全学』青土社、1998年。
- \_\_\_\_\_『文明の死／文化の再生』岩波書店、2006年。
- \_\_\_\_\_「芸術の起源と機能的寛容」、[村上陽一郎、千葉真編]所収、2009年。
- 村上陽一郎、千葉真編『平和と和解のグランドデザイン —— 東アジアにおける共生を求めて』風行社、2009年。
- Burridge, Kenelm. *Someone, No One: An Essay on Individuality*, Princeton University Press, 1979. (宮永國子訳『個のアイデンティティ —— 誰かであること、誰でもないこと ——』世界思想社、1996年。)
- Goffman, Erving. *Interaction Ritual: Essays on Face-To-Face Behavior*, Pantheon, 1982. (浅野敏夫訳『儀礼としての相互行為 対面行動の社会学〈新訳版〉』法政大学出版局、2002年。)
- Gray, John & Smith, G. W. "Introduction", Gray, John & Smith, G. W. (eds.) *J. S. Mill On Liberty in Focus*, Routledge, 1991. (泉谷周三郎、大久保正健訳『ミル「自由論」再読』木鐸社、2000年。)
- Mill, J. S. *Utilitarianism, Liberty, and Representative Government*, J. M. Dent & Sons, 1910. (関嘉彦編『世界の名著 49 ベンサム J. S. ミル』中公バックス、1979年。)

※本研究には、平成22年度科学研究費補助金〔特別研究員奨励費〕(課題番号208320)を使用した。



## **Functional Tolerance as a Structure of Society : From the Person to the Individual**

<Summary>

Yuki Hagiwara

This paper is a sequel of “On the Other in a Relation to Functional Tolerance”. Functional Tolerance is a theory proposed by Yoichiro Murakami. It shows necessary conditions for several kinds of concepts and theories to function. In the last paper I tried to reconsider it as a theory of human perspective from the view of Lacanian psychoanalysis. However, it is also a theory of the structure of society. The purpose of this paper is to discuss about functional tolerance by referring to Kenelm Buriddge’s social anthropology.

The theory of functional tolerance consists of two important concepts. The one is nomos which is a regulative power, and the other is chaos which is a kind of energy directed blindly. Nomos gives direction to chaos, which is a process of socialization. A baby gradually learns languages and rules, and then his/her chaos is molded. An example of the rule is harm-to-others principle in modern society. People have a free hand if they don’t harm others and society. This is the reason their self-determination rights should be protected though many people judge that one’s decision is foolish.

However, there are some misfits who are alienated from society. Their behaviors are recognized as deviation from the social order. For example, the realm of artist is a sanctuary where the application of social nomos is limited. According to Murakami, their behaviors are usually permitted because they absorb the chaotic energy of ordinary people. Their deviation paradoxically serves as a stabilizer against the chaotic explosion of energy. This example shows

there is a surplus part which is not regulated by nomos and it has an important role to maintain society. This surplus part is called functional tolerance.

A similar instance of the role of artists mentioned above is that of shamans in traditional society. Burridge calls ordinary people or well-socialized people *the person*. Shamans are not the person but they are also the members of society or cultural beings. One important role of shamans as the unsocialized elements of the person is to heal the moral lesion and ordinary people consult them. Shamans not only resolves but also delineates moral problems, reveal them, and suggest solutions. In this way they reiterate the normative moralities, but this process contains the seeds of qualifying, developing, or transcending current moralities.

Artists and shamans can be an investigator of moral innovation. When one as the person becomes a creative spark poised and ready to change tradition, he/she will be *the individual*. He/she tries to transcend the given moral order and the theory of functional tolerance shows structurally how it will be achieved.